

福島県PTA連合会会報  
第26号\_S63.10.25

# 大会主題

次代を創る子どもの広い心と  
たくましい体を育てるPTA活動

# P.T.A. 会報

53-5  
館内  
部連  
屋合  
部年  
田少  
部P  
黒島  
市黒  
島黒  
福島  
福島  
電話  
0245  
45) 5  
982  
本  
田文  
吾  
所  
所  
印刷  
印刷  
電話  
57-1071

## 次代を創る大会 盛会裡に終わる

### 第37回福島県PTA研究大会喜多方大会

澄んだ秋空のもと、長い伝統に包まれた「蔵のまち喜多方」に、県内各地より二千二百余名の会員の参加を得て、二十一世紀を担う子供達の健やかな成長を希い「次代を創る子どもの広い心とたくましい体を育てるPTA活動」を研究主題に、第三十七回福島県PTA研究大会が九月八日・九日の二日間にわたり開催された。

一日目は、力強い開示のことばに引き続き、主催者あいさつ、多年にわたる会の充実・発展のため尽力された方々、団体に感謝状・表彰状が贈

呈された。また、ユーモアあふれる喜多方市長の「歓迎のことば」に、さわやかな笑みが流れ、たいへんなごやかな開会行事となった。

その後、六つの分科会に分かれて、提言をもとに、質の高い活発な研究協議がなされ、各分科会とも充実した中味でテーマに迫ることができた。

二日目は、全体会で分科



会からの報告があり、片岡先生の全体指導はPTA活動の本質にかかわる問題であり、会員は熱心に聞きとっていた。その後、腹にしみわたる「会津喜多方蔵太鼓」の豪快な演奏が披露された。

女性登山家、田部井淳子氏の講演は貴重な体験をもとに、エベレスト制覇の時のエピソードや彼女の子育て論は、聴衆を引きつけずにはおかないすばらしいもので、大きな感銘を与えた。

閉会式で次年度開催地の相馬市に県連Pの旗を引きわたし、実り多い喜多方大会は終了した。

### 輝く受賞者

昭和六十三年年度県連P  
会長より受賞、芳名簿。

#### 〈感謝状〉

「県連P前会長副会長」  
前会長 阿部 真樹  
前副会長 若林 大

#### 「県連P前理事」

渡部之男 鈴木清重  
森 啓子 渡部省一

鶴水洋子 岡部 恒  
鈴木義次 渡部 晃

#### 「県連P前事務局員」

井関敬一 坂本寿昭  
深谷克美 下山政一

#### 「各地区前事務局長」

桑原兵永  
鴨田守夫 草野栄寿

江原靖夫 原 市英  
広瀬成裕 井関鉄雄

佐藤好文 真壁栄一  
木幡正俊

#### 〈表彰状〉

福島市立荒井小PTA  
同 市立茂庭小PTA

同 市立金谷川小PTA  
同 市立野田小PTA

同 市立北信中PTA  
同 市立信夫中PTA

同 市立信夫中PTA  
飯野町立大久保小PTA

伊達町立伊達小PTA  
桑折町立睦合小PTA

月館町立月館小PTA  
二本松市立大平小PTA

二本松市立大平小PTA  
二本松市立塩沢小PTA

白沢村立白岩小PTA  
岩代町立新殿小PTA

東和町立上太田小PTA  
白沢村立白沢中PTA

郡山市立芳山小PTA  
同 市立福良小PTA

同 市立大島小PTA  
同 市立行健小PTA

同 市立行健小PTA  
同 市立高瀬中PTA

須賀川市立三小PTA  
天栄村立牧本小PTA

平田村立小平小PTA  
古殿町立古殿中PTA

常葉町立山根小PTA  
塙町立塙小PTA

鮫川村立富田小PTA  
若松市立仁小PTA

若松市立一箕中PTA  
若松市立一箕中PTA

猪苗代町立東中PTA  
金山町立本名小PTA

高田町立赤澤小PTA  
只見町立只見中PTA

いわき市立平二小PTA  
同 市立高久小PTA

同 市立四倉小PTA  
同 市立久之浜一小PTA

同 市立長倉小PTA  
同 市立中央台北中PTA

同 市立草野中PTA  
同 市立川部中PTA

同 市立川部中PTA  
川内村立川内三小PTA

浪江町立東中PTA  
原町市立原町二中PTA

小高町立小高小PTA  
ほか個人九十五名。

# 第一分科会

「会員ひとりひとりが、要性についても大切な提言がであった。いくつかの質問に答える形で、次のような助言があった。」

提言では、松陽中学校から、新設学校における組織編成や運営上の諸問題と対応について、又羽太小学校からは、地域ぐるみの育成活動と楽しい活動、後継者の育成について、そして榎原小学校からは、リーダーの育成や委員会の活性化等について発表があった。

協議では、中体連への協力のあり方や学年委員会の活動等について活発な質疑応答がなされた。又、地区委員会の組織運営や財政面における対策、スポーツの位置づけ等についても、意見の交換がなされた。地域、学校、PTAの情報交換の必要

# 分科会報告

も父親の役目である。PTA会報の発行についての質疑のあと、町ぐるみ地域ぐるみの活動の大切さや、主体的活動のむずかしさ、会合の時間設定上の悩み等について、活発な意見の交換がなされた。



広報発行にあたっては広報そのものが論争の場にならないよう配慮するとともに、会員同志を結びあ暖かい情報の通い合いが大切だとの助言もあつた。また、会合では、欠席者に対する配慮が大切であるとの意見も出された。



最後に、助言者から、子どもに対する愛情がPTA活動の原点である。そのためにも、会員は教養を高める必要がある。PTA活動の基礎は、教養活動である由因である。研修会・講習会の学習を全会員のものとする工夫が必要である。生涯学習の立場から学習するPTA、参加するPTA、実践するPTAとなるよう目標をもって活動してほしいと指導があった。



①親が自信なく役割を放棄している。②人間関係を学ぶ場がない。③親の仕事場が遠く子どもは親の努力する姿を見られない。④学歴社会にあこれ学力にふりまわされる。

# 第二分科会

「家庭教育の役割を考え、家庭の子どもに対する教育的機能を回復しよう。」

提言では本郷一小より家庭円満で統一した家庭教育の方針を持ち、父母自から学び模範となり、子どもの相談相手となること。鹿島中よりは、学校教育は知・徳・体に加えて勤労を通しての連帯、協調の精神を培うこと、そのために、学校と父母との意志の疎通が十分でない、いろいろな形で、家庭との結びつきを強める活動の工夫をした。大野小より、家庭教育は親と子の共育である。最近家族意識が希薄化し、家庭が弱体化している。家庭での躾、その中で父母の果たすべき役割について、一人の人間として、自らの人生を自信を持って生き、「共育」する努力をしていきたいと提言があった。

「会員相互の教養を高めるPTA活動を推進しよう。」

信夫中学校から、教養を高める活動では、研修の視点が具体的で魅力的な内容のものであることが大切であり、そのためにも主体的な計画づくりが必要であること。長沼小からは、新聞発行、親子ふれ合い活動、手づくり教室等の実践活動の紹介、そして翁島小学校からは、生涯学習の立場に立ったPTAの教養活動や地域活動等について夫々提言がなされた。

マンネリ化しがちなPTA会報の発行についての質疑のあと、町ぐるみ地域ぐるみの活動の大切さや、主体的活動のむずかしさ、会合の時間設定上の悩み等について、活発な意見の交換がなされた。



「家庭教育の役割を考え、家庭の子どもに対する教育的機能を回復しよう。」



て教えられるように。人生の生きる目的を持ち、それに向って力の限り努力する子供を育ててほしい。

# 第三分科会

「家庭教育の役割を考え、家庭の子どもに対する教育的機能を回復しよう。」

提言では本郷一小より家庭円満で統一した家庭教育の方針を持ち、父母自から学び模範となり、子どもの相談相手となること。鹿島中よりは、学校教育は知・徳・体に加えて勤労を通しての連帯、協調の精神を培うこと、そのために、学校と父母との意志の疎通が十分でない、いろいろな形で、家庭との結びつきを強める活動の工夫をした。大野小より、家庭教育は親と子の共育である。最近家族意識が希薄化し、家庭が弱体化している。家庭での躾、その中で父母の果たすべき役割について、一人の人間として、自らの人生を自信を持って生き、「共育」する努力をしていきたいと提言があった。

「家庭教育の役割を考え、家庭の子どもに対する教育的機能を回復しよう。」

提言では本郷一小より家庭円満で統一した家庭教育の方針を持ち、父母自から学び模範となり、子どもの相談相手となること。鹿島中よりは、学校教育は知・徳・体に加えて勤労を通しての連帯、協調の精神を培うこと、そのために、学校と父母との意志の疎通が十分でない、いろいろな形で、家庭との結びつきを強める活動の工夫をした。大野小より、家庭教育は親と子の共育である。最近家族意識が希薄化し、家庭が弱体化している。家庭での躾、その中で父母の果たすべき役割について、一人の人間として、自らの人生を自信を持って生き、「共育」する努力をしていきたいと提言があった。

「家庭教育の役割を考え、家庭の子どもに対する教育的機能を回復しよう。」

提言では本郷一小より家庭円満で統一した家庭教育の方針を持ち、父母自から学び模範となり、子どもの相談相手となること。鹿島中よりは、学校教育は知・徳・体に加えて勤労を通しての連帯、協調の精神を培うこと、そのために、学校と父母との意志の疎通が十分でない、いろいろな形で、家庭との結びつきを強める活動の工夫をした。大野小より、家庭教育は親と子の共育である。最近家族意識が希薄化し、家庭が弱体化している。家庭での躾、その中で父母の果たすべき役割について、一人の人間として、自らの人生を自信を持って生き、「共育」する努力をしていきたいと提言があった。



①親が自信なく役割を放棄している。②人間関係を学ぶ場がない。③親の仕事場が遠く子どもは親の努力する姿を見られない。④学歴社会にあこれ学力にふりまわされる。

# 喜多方大会

## 第四分科会

「子どもが豊かな心を育成するための文化活動をすすめるよう。」

提言の稿

中より、親子のふれあいと地域活動を地域単位の支部活動に力を入れている。親子座談会・登山・バレーボールなど支部の実情に応じ工夫され、親子が何でも話せる雰囲気ができ、子ども達の生き生きとした生活の姿を見ることができた。と発表があり、城西小よりは、子どもと取り組む社会体育について、スポーツ少年団の練習は先生方の奉仕、保護者は条件整備、大会の際の協力とし、子どもたちの練習や大会出場等の努力する姿に対しての接し方で、子どもとの話し合いの時間を必ず設けるように努力し、温かいふれあいの場を求めようとしていると発表



があった。また、泉小よりは、勤労体験活動に積極的に協力して「汗を流し工夫し合って実践」により親子の絆が深められよき伝統をつくりあげていくとあった。

◎中山・横山先生の指導  
・自然体験の活動が大切  
・郷土愛を育てる(まつりへの参加、伝統芸能)も大切。  
・ボランティア活動を必ずとり入れてほしい。  
・親子の活動で、親は口は出すが手は出さない。  
・三世代交流の活動も大切(昔話、わらざい)

・子供の遊びの場の設置。  
・激しい都市化現象に対するPTA組織の対応」などが挙げられる。

## 第五分科会

「ふるさとを愛する子どもたちの育成をPTA活動の中ですすめるよう。」

川俣・郡山・玉川の三地区から健全育成活動のとりくみが紹介された。各地区の実情の相異や環境条件の差異はあるものの健全育成によせるPTA活動の実態には一貫性が保たれ子ども達とのふれあいを重視する方向が強く印象づけられた。

とりわけ提言の中で強調されていたことは「ふるさとを知りふるさとを愛する心」「環境条件を浄化するための組織活動」

「激しい都市化現象に対するPTA組織の対応」などが挙げられる。

研究協議の中では健全育成をねらった諸行事について会員の参加意欲を高め相互理解に支えられた活動の展開を望む声が大きかった。共働き家庭の増加を障害とする認識をのり越え会員が出席しやすい条件を工夫し整備することがPTAの課題であり指導者層の大きな仕事としてとらえられた。



若い世代の会員はおしなべて高い識見をもち強い協力態勢を示すので若い力を大切にしていこうという発言は傾聴に値するものがあつた。

二瓶・五十嵐両先生の助言の中で特筆されることはPTA活動を「こどもの行動化にまで高めていこうとする配慮」「活動の主役を子どもに与え親が見守り援助する立場」

「こどもの立場に立って行事を構成する」「生涯教育の観点から行事を精選すること」の重要性が述べられのりの多い分科会となつた。

## 第六分科会

「心身に障害をもつ子どもひとりひとりの生きがいを高めるPTA活動を考えよう。」

安達・船引・坂下から提言をいただいた。

養護教育を支援する立場や実際に養護学級を担任している体験を通して述べられた中から共通する点を拾い上げてみる。

生活経験の乏しい子ども達のために交流の場を広げ豊富な体験学習を推進する必要がある。養護教育の重要性を理解し啓発する援助活動をPTAの組織を通して取りくむことが大切である。子どもと共に伸びていこうとする意欲とよろこびを求めていかねばならない。偏見や見栄をふりきり子どもの幸せを最優先させて社会参加をねらうといかなければならないという内容だった。

研究協議のなかでは次の点が強調された。養護教育の啓発や活動推進に当たってはPTAの組織に位置づけて計画的に実践を図る要がある。



特殊学級という呼称を避け特別な対応や接触は慎むべきである。養護教育の推進は地域活動としてとらえ養護教育の裾野を広める要がある。養護教育の基盤は愛情の二字に尽きるといふことであつた。

最後に角田・坂本両先生から次のような助言をいただいた。生命活動の遅滞やとまどいを見極め自立への援助を心がけて欲しい。養護教育の必要性をPRし学校自体が魅力を求めて工夫努力すべきである。人格を認めあい扶助の心を育てて欲しいと結ばれた。

記念講演

# エベレストまでの道

女性登山家 田部 井 淳子 氏

一九七五年エベレスト  
登頂を女性として世界で  
初めて制覇された田部井  
淳子氏の記念講演が、九  
月九日午前十時半から一  
時間半にわたり喜多方プ  
ラザの大ホールで行われ  
た。小学生の頃からエベ  
レスト登頂までの貴重な  
体験を講演された。

### …講演の要旨…

#### ○山登りの動機

小学校四年生の時、山  
登りの大好きな受持ちの  
先生につれられて、夏休  
みに友達と一緒に那須山  
に登った。生まれてはじ  
めて二千m近い山、その  
山は今までの山とはちが  
っていたので、強烈な驚  
きと感動は今でも忘れる  
ことができない。自分の  
知らないところ、行った  
ことのないところは沢山  
あることに気づき、今で  
も生き生きと思い出され  
る。このことから、小さ  
い子どもには、体を感じ  
るようなチャンスは沢山

与えるようにしたいと思  
っている。

山登りは、一步一步自  
分の足で登らない限り、  
頂上にはたどりつくこと  
ができない。ゆっくりで  
も自分で歩いていけば、  
みんなと同じように頂上  
につくことができたと  
いう満足感は忘れること  
できない出来事だった。

#### ○東京生活での山登り

高校まで三春で過ごし  
大学に入ってから関東の  
山に登るようになった。  
自分の知らない山が沢山  
あることから山登りも範  
囲を広げていった。

人間は、それぞれ数を  
ふやしたいという気持ち  
はみんな持っていると思  
う。登った山がふえてい  
くのが最大の喜びであっ  
た。大学を卒業し、日本  
物理学会に就職した。仕  
事は厳しく忙しかったが  
山登りは続けた。22歳の

時、男だけの山岳会に入  
り、岩登りに挑戦したが

その時、人間は順応性が  
あるということをつくづ  
く感じた。岩登りはきつ  
い肉体労働である。つら  
いけれど、これを毎週続  
けていくと体が慣れ、岩  
登りに適した肉体になっ  
ていく。また、どの山に  
するか目標をたてると、  
一週間はすぐ過ぎてしま  
う。一番はげしく山登り  
をしたのが20、30歳ぐら  
いの間であった。登る目  
標が次から次へとでてく  
ると、この目標に向って  
がむしゃらに仕事をして  
山登りもするという生活  
の繰り返しであった。今  
考えてみると、山登りが

自分自身の活力源であり、  
また一種の清涼剤でもあ  
った。自分自身が打ちこ  
めるものがあるというこ  
とは、幸せであり、時間  
の使い方も上手になり、  
本来の仕事も一生懸命や  
れたのではないかと思っ  
ている。

#### ○エベレスト登頂

女性だけでエベレスト  
登山を試みようと思ひ、  
71年3月に決心した。計  
画を出して一年半後の72  
年8月にネパール政府か  
ら許可がおりた。それか  
ら人をさそい18名の人が  
集まった。

本当に行こう、やろう  
という意志の  
強い人が大方  
であるという  
ことは、この  
前の70年に登  
ったアンナブ  
ルナ峰でよく  
わかった。困  
った時にどう  
すればよいか  
を考えられる  
人、与えられ  
た環境の中で  
物事を解決す  
るために前向  
きに考えられ  
る強い意志の

ある人を求めた。  
エベレストは最高峰の  
山であり、世界各国から  
の申込みが殺到し、登山  
許可がおりたのが75年春  
になってしまった。  
71年には75年までの4  
年間のカレンダーをつく  
り、やるべきことを全部  
書き出した。  
72年には、エベレスト  
に登った記録を全部調べ  
た。  
73年になると、どうし  
て登るかという具体的な  
ものをつくり、各分担に  
分かれて仕事をし、また  
会合も数多くもった。地  
域も職業もちがう人達が  
集まるといことは大変  
なことであった。何人か  
はやめ、最終的には15名  
になってしまった。また  
持ち物のリストアップも  
完了した。  
74年には、リストアッ  
プした品物を集める仕事  
になり、できるだけ軽量  
化をはかり節約もしたが  
それでも4千3百万円、  
11tの荷物になった。そ  
の約半分が食料品であっ  
た。  
75年春登山することに  
なったが、エベレストに  
登るために1400日の準備が



この一瞬の出来事のため  
に1400日間、いろいろな  
地域や職業もちがう人達  
が準備してきたというこ  
とが最も貴重なことであ  
り、こうして登ったとい  
うことを多くの人達に知  
ってもらいたいと思う。  
エベレスト登山ができ  
たのも、体力や技術だけ  
が勝っていただけではな  
く、強い意志があったか  
らこそ、長い準備にも耐  
えることができたのだと  
思う。  
この登山を通して、意  
志こそ力だと思った。

須賀川一小 P T A 会長  
大内 康司

第三十七回目を迎えた  
県 P 大会、第二分科会に  
出席しました。各提言者  
共、良く研究されており  
短時間の中で良くまとめ  
上げたと思います。

又、発表の際、スライ  
ドを使用したり、作品の  
展示をする等の工夫の跡  
が見られました。

全体会での分科会報告  
は、担当の方は大変でし  
ようが、年々

速報が充実し  
て配られる様  
になったので、  
考え直しても  
良いのではないでしょ  
うか。

記念講演の、田部井淳  
子さんの話は内容も判り  
やすく、山を愛しみなが  
ら、家庭や家族への気配  
りの様子が手に取る様に  
話され、楽しく拝聴致し  
ました。

何時の大会でも見られ  
る光景で、残念に思いま  
す閉会式の出席の様子は、  
たかが十分か十五分位の  
時間を惜しんでの行動で  
しょうが、充分反省する  
必要があると思います。

県大会に限らず、東北、  
全国大会と、会場に入り  
切れない人数を集めて、  
関心の薄い大会を開催す  
るより、好評の母親セミ  
ナー方式の研修会等の検  
討もしてみたいかがで  
しょうか。開催地の皆様、  
御苦労様でした。

いわき平一中 P T A

佐藤 弓子

去る九月八、九日の両  
日、喜多方市に於いて、  
「次代を創る子ども」の広

# 喜多方大会に参加して

い心と、たくましい体を  
育てる P T A 活動」を主  
題とした福島県 P T A 研  
究大会に参加しました。

二十人の会員による熱  
気の中で、私は「会員ひ  
とりひとり、自らの役  
割りを果たす民主的な組  
織運営を考えよう。」と  
いうテーマの第一分科会  
に参加しました。

現在、わが国の教育問  
題は、到る所で活発に論  
じられています。  
将来をになう子供の幸  
せの為に現在おかれて

いる様々な危機的状況を  
打破する為に P T A 活  
動がいかに重要かを痛感  
いたしました。その活動  
を積極的に推進するため  
に P T A は、子供の幸せ  
を願う父母と教師の会  
であるという原点を忘れて  
はならないと思えました。  
分科会でも、「P T A  
がわが子の為の組織であ  
るとい認識を持つ事、  
一部の役員にまかせる傾  
向がある。」などの提言が  
ありました。それらを解  
決するには  
子供の幸せ  
を中心にと  
え、P T A  
会員各自が、  
親として教師としての責  
任を改めて自覚する事が  
必要だと、私自身再確認  
させられました。

相馬中村一小 P T A 会長  
波多野広文

市長さんの「蔵とライ  
メン」をアピールした  
挨拶で始まった喜多方大  
会、まさに行政と市民が  
一丸となり観光都市をめ  
ざす心意気を感じられま  
した。子供達の健全育成  
や教育問題等についても  
すばらしい連携がとられ

ていることと思われま  
す。さて、県 P 研究大会は  
「蔵とライメンのまち喜  
多方」から「民謡と野馬  
追の里・歴史と開発のま  
ち相馬」へと引き継がれ  
ました。相馬大会も、今  
大会の見事な運営を参考  
にさせていただき、「相  
馬に来て良かった」と思  
い出に残る大会にすべく、  
閉会式後に実行委員の方  
々の控室に挨拶に行った  
ところ、「良かったね」  
「ご苦労さん」と声が飛  
び交ひ、握手をし合っ  
ている光景が目に移りま  
した。ここにも研究大会の  
一つの成果があったよう  
に思えました。開催実行  
委員の皆様方、本当にご  
苦労様でした。

## 大会事務局から

「県連 P 大会の事務局  
当番校になるらしい」と  
いう話が出始め、準備委  
員会を組織し、正式に事  
務局校となったのが本年  
四月である。第一回の実  
行委員会から会を重ねる  
たびに人の和の大事さを  
身にひしひしと感じ、焦  
れば焦るほど会議は二転  
三転し事務局の考えてい  
ることがうまく委員各位  
に伝わらなかつたり、連  
絡文書の見落しがあつた  
りで全く右往左往の状態  
で、時の流れだけが気  
なる毎日であつた。遅く  
ても一歩一歩確実に仕事  
を進めていかなければな  
らないということは今回  
ほど痛感させられたこと  
はない。そして、今まで  
の大会を参考にしながら  
喜多方という地域性を考  
え、喜多方だからこそで  
きるといふ大会にしてい  
こうという考えに立った  
のは事務局を引き受けて  
から大分後のことである。  
熟慮に熟慮を重ねた末、  
各委員会の分担事項を審  
議し、共通理解を図りな  
がら結論を見たときの安

堵感はまだ格別であつた。  
分科会場の設営や速報の  
内容充実では全国大会に  
もないような出来である  
と賞讃され、いくつにな  
っても賞められるとつい  
嬉しくなるのも人情か。  
各委員会には、それぞれ  
ご苦労をおかけしたが、  
特に速報の発行、要項の  
印刷にあつた編集委員  
会の皆さん、会場設営に  
あたり全く裏方さん役に  
まわつた会場委員会の皆  
さん等々、本当にお骨折  
りをかけました。  
ユーモアたっぷりに話  
された記念講演の田部井  
淳子氏には絶賛の拍手の  
嵐がとびました。心から  
御礼申し上げます。県連  
P 事務局の永井先生のご  
指導、関係各位の絶大な  
るご支援ご協力これまた  
有難うございました。全  
てが終了し、県連 P 旗が  
次回当番地区の相馬に渡  
されて、ああこれで無事  
役目を果たすことができ  
たと安堵し、成就感にひ  
たることができましたように  
思う。これからの本大会  
が益々発展し、更に充実  
することを心から願って  
御礼いたします。

× × ×



# 《伊達》 認めあうPTA活動

## 伊達町立伊達小学校PTA

本校は、福島市に隣接しており市のベクトタウ的存在から、学識経験者や文化人と云われる人達が非常に多く、そのような環境から、教育に対しては感心が高い。

本PTAはその様な背景にあり、PTA活動は活発に進められている。

特に、あらゆる活動の中に一本の柱を建てている。その柱が「子どものよさを認めあい、はげましあう」である。この柱



(家庭スポーツ大会  
ボール手渡し競争)

は、単なるスローガンではない。すべてのPTA活動、学校行事はもろもろ家庭においても、実践に取り組むよう会員一貫となって努力している。この運動を展開するためには、次の様な取り組みをした。昨年一年間は特別教育問題懇談会を数回開催し、骨子を作りこ

とあるごとに訴えて来た。「認めあい」は子どもにだけではない、活動全体にも取り入れそれぞれの立場で自由に行事が出来る様にしお互いに認めあ

って行く事である。それまで一律だった学校行事が、各学年ごとにその学年に合った予定を作り行事を行うようにした。ファミリー学級懇談会等も一つの例である。

授業参観後、一年生は親子ドッジボール大会、二年生は親子ゲーム、六年生は親子座談会等それぞれの学年に合わせて行われた。以前は出席者が少

なかつたが、今日では大変多くの方が出席する様になった。又、本会には五つの専門部会がある。その専門部会も自主性を尊重して事業を進めている。

これは、伊達小最も自慢の行事で厚生部が行っている家庭スポーツ大会である。

夏休みに入り八月の第一日曜日八時半開会である。各町内子ども会とともに会長さんを中心親子で参加競技する。厚生部長の開会のことばで始まり、ラジオ体操のあとボール運びリレー、綱引き、長縄とび入り競争、子ども会対抗リレー等、九つの競技が、子ども会毎に競い合う。夏の炎天下競技する者も応援する者も汗が流れて止らない。

本会は、人それぞれに持っている良さを認め伸ばして行く運動を展開している。

## 特色あるPTA活動

### 《安達》

# 児童の快適な 環境づくりをめざして

## 白沢村立白岩小学校PTA

本校は、本宮町から8kmほど入った白沢村の中央に位置し、緑豊かな環境に恵まれた学校である。

わがPTAの活動は、部落選出と学級選出の実行委員を中核にして、五つの専門部と学童部を組織して児童の健全育成をめざし、快適な教育環境づくりに努めている。

32人の実行委員の大部分は男の方で、実践力を発揮してリードしているが、特に環境整備委員会を中心とした、快適な環境づくりの活動について紹介したい。

本校は五年前に本造校舎を改築して、近代的なモダンな校舎になったが、敷地は新土のうらおいの無い環境であ



(ヘチマたなづくり)

ことから、PTA活動の中心は校舎周辺の環境づくりとなった。樹木・庭石の設置、花壇・池・栽培園づくり等、村当局への予算陳情、奉仕作業による造成と年次計画で着々と整備を図ってきた。環境づくりは美化・緑化だけではなく、児童の理科学習に役立つよう、飼育小屋、観察園、花壇池等の施設づくりが会員の手づくりで進められたし、草花苗・球根・魚等

の寄付がぞくぞくあった。62年には県理科研究会がもたれ、理科環境の整備について好評をいただいたのも、本PTA活動の特色といえる。

### ◇ 年間の主な活動

- ① 草刈作業 年四回
- ② 奉仕作業 年二回
- ③ 廃品回収 年三回
- ④ 米づくり、いもづくりの援助活動

◇ 緑の少年団の育成  
豊かな自然環境を生かし、自然に親しみ、愛護する児童の育成を図ってPTAの中に白岩小緑の少年団育成会を組織し、学校緑化並びに地域緑化保護活動への指導援助に活動している。

◇ 快適な環境づくりへの推進活動

校舎改築促進運動を手始めに、プール改築運動(63年度完成の予定)、体育館改築、大駐車場の設置についても、一、二年中に実現される見通しが立ち、村当局の温かい配慮をいただけるようになったのも、わがPTAの環境整備にかける熱意と、たゆまない活動の成果と、子どもと共に喜んでいるところである。

### 《郡山》

## 生徒の健全育成を目ざし 地域と学校を結ぶPTA活動

郡山市立高瀬中学校PTA

本PTAは生徒の健全育成をめざし、家庭と学校、父母と教師が協力し合い地域における教育の振興と会員の教養を高めることを目的として各種の事業を行っている。

その主なるものは、

- ①生徒理解と会員の教養を高める活動。
- ②会報発行や学校行事への協力および環境整備。
- ③危険箇所対策や生徒の校外生活の指導。
- ④会員の体育活動および



(花と緑の学校をノ)

厚生に関する活動。そこで前年度に実施した主なる事について述べたいと思う。

①親子のふれあいを深め会員の教養を高める活動。本校文化祭「のぞみ祭」が十一月月上旬二日間におたって開催された。ここにPTAも参加し、全生徒、全参加会員分の肉汁をいくつかの大釜で料理し、秋晴れの空の下親子そろって秋の味覚を満喫した。さらに親子綱引きやゲームに興じ親子のふれあいを十分に深めることができた。また生徒の作品を見学したり各種発表会をきいたりして現代中学生への理解を深めた。教育講演会には岩手大 学教育学部長をお招きし親子のありかたやその役割について親子ともども講演を聞き深い感銘を受けたものと思われる。

②新校舎落成と環境整備。本校の新時代をひらく新校舎落成を機に部活動

関係の設備を充実し、また花と緑に囲まれた学校にするために花壇や土手の手入れなど全会員で努力した。校庭の高台には掲揚塔を三基設置し、いつも校旗や生徒会旗がはためいているのを見るのは会員の大きな誇りとなっている。

③会員の親睦を深める活動。PTAソフトボール、家庭バレーボール、混成バレーボールのチームを編成し、早朝や夜間の練習にはげみ、和やかな練習を通して会員の親睦を深めてきた。

その成果は市P連在催の球技大会で発揮され、ソフトボールは見事優勝の栄冠をかちとることができた。

その他数々の活動を会員相互の協力のもとに行っているが、今後も生徒の健全育成を目ざし、学校と地域の結びつきを深めるために努力していきたいと思う。

## \*\*\*\*\* 特色あるPTA活動 \*\*\*\*\*

### 《石川》

## 児童の健全育成を目ざし環境 づくりにとりくむPTA活動

平田村立小平小学校PTA

本PTAは昭和二十三年に発足し四十一年の歴史をもち、この九月、近年の運営活動が評価され、県P、東北Pから優良団体として、ダブル表彰を受ける。

P会員は二百十名で、組織は四専門委員会（総務教養、施設、厚生、補導委員）、方部委員会、学年委員会と児童活動後援会から構成、地道な活動をしている。

本PTAの特色は、会員の職業等を配慮し、事業は抱きあわせて組み合員の参加率、資質の向上につとめている。

例えば、父親参観日は、授業参観（総教）講演会、学年対抗ソフト（厚生）立看板の設置（補導委員 会事業）と、組み、終了

後は、全体反省会をもち、会員相互の親睦をはかっている。

また、年四回の奉仕作業は、短時間で能率をあげるため半日の奉仕として成果をあげている。

△写真は、花壇づくり。大きな事業として、夏季休業前の七方部同時懇談会前に、方部ごとの、PTC（子ども）が一体となって、廃品回収を実施し、七年間で、二百二十万余の益金をあげ、児童の健全育成のために、



(9・25の奉仕作業から)

童の健全育成のために、遊具の新設、環境整備、図書充実等にあてている。これらの事業推進にあたっては、PTAしおりを作成（二十二項の四十ページ）し、共通理解に立って活用している。

なお、本PTAは、次の四項を特に重点施策として運営にあたっている。

- 一、会員相互の一般教養を高めよう。
- 二、諸会合は、定刻にはじまり定刻におわる。
- 三、専門委員会の活動を活発にしよう。
- 四、何でも、気楽にしゃべれるPTAに。

現在の運営活動の中で、三役、常任委員会は、常に百パーセントの出席でPTAに対する関心がみられ、各種事業は、計画通り、スムーズに行われて何よりである。

今後は、ダブル表彰を励みに、二十一世紀を担う子どもたちを、明るく、かしこく、たくましく育てるためにも、PTAのあり方を見なおし、なお一層、子どもの健全育成をはかっていくことを課題とし、取り組んでいきたい。



## 《東白》 理解し、学び、協力 する父母と教師の会

高町立塙小学校父母と教師の会

PTA活動の方針として、学校教育の理解、父母としての教養(家庭教育)、学校教育への協力の三つをかかげて、本部、学年、文化、厚生、環境のそれぞれの委員会が、地域にねざした塙小学校としてのPTA会のあるべき姿を追求している。学校教育の理解については、本部、各委員会で年間計画を立て、テーマを持った話し合い、講師による講演会、企業につ



(集団登校の安全指導)

とめて話を聞く機会のない人達のために、企業に出向いての家庭教育講座PTA新聞、週二回程度の学校日より、教育を語る会(夜間)などを実施して深めている。こうしたことは、本校教育の理解を深めることと相まって、父母としての教養を高める内容につながることである。

今、PTA活動の在り方を考える視点の第一に「家庭を見つめる」ということがあげられている。われわれは、ここに向けて更にその深化がはかられる活動を生み出そうと努力している。

第二の活動は、本校教育目標具現化のために父母のあるべき協力の内容として、環境づくりがあげられており、家庭環境づくりを核とし、健全な地域環境づくりのため商店会、各種団体との連携をはかり、危険箇所での事故防止、楽しい遊び

交通指導にあたっては街頭での立哨に止まらず、集団登校の列と共に歩きながらの指導、助言等の活動は、本年受賞した学校安全功績の内容閣総理大臣賞に大きく寄与するものであった。更に、学校環境づくりは全体計画に基づき、全委員の度重なる奉仕作業により校舎内外の美的環境、緑化、施設、設備は資金をかけずに大きな完成をみる事ができた。

また、スポーツ少年団の助成や各方面での健全育成活動に対する物心両面の協力も自賛したいものである。

分校から独立して四十年、現在地に新校舎ができて十八年の浅い歴史ではあるが、今のみんなの願いは、「自ら考え実践する子どもを育成する。」ことである。県P連、東北P連の受賞を機会に、念願をめぐして更に活動の充実につとめていきたい。

## 特色あるPTA活動

1. 自ら学ぶ力をもつ生徒
2. 思いやりのある生徒
3. 健康でたくましい生徒

これらの学校教育目標達成のためにPTAとしても、生徒の健全育成を中心にしながら諸活動に

## 《北会》

### 学区小学校PTAとの連携

猪苗代町立東中学校PTA

本校は昭和三十三年四月に旧長瀬中学校と旧月輪中学校が統合して開校したもので、現在生徒数は三一名である。

二十一世紀を担うに足る生徒を育成するために「ひいらぎ(剛毅・優雅・忍耐)」の伝統を受け継ぎ、自ら考え正しく判断できる健やかな生徒を目指し、次の教育目標を設定している。



(雪囲い奉仕作業)

当し、専門部の運営について助言をしたり、他の部との連絡調整にあたり、していることである。二、中学校区各小学校PTAとの連携

本校学区の三小学校(長瀬・月輪・山潟)PTAと組織している東部教育を語る会が母体となり、年二回会合をもって、合同で活動できるものについては積極的に連携するようにしている。又、この会を軸にして行事調整なども円滑に進められている。

三、生徒の健全育成  
一人ひとりの生徒が健やかに成長し、自己実現を目指すことができるように、学校、家庭、地域、地域のそれぞれの持ち場でその機能を十分に発揮し、育成にあたっては、素直にのびのびと成長している。

四、入学予定者の親子交歓会の開催  
来年度本校に入学を予定している三小学校の児童が本校を会場にして親子で集い、交歓会を催して楽しいひとときを過ごし、入学前から顔なじみになるようにしている。

# 〈両沼〉 二十一世紀を担う児童の 健全育成と学校環境緑化

会津高田町立赤沢小学校PTA

本校は、会津盆地の南西部にあり、稲作や果樹栽培などを主とする純農村地域にある小規模校です。

PTAは、一三四名の正会員と二二三名の特別会員で組織しています。ほとんどの家庭が兼業農家で多忙な毎日であるが、子どもの教育については深い関心を持ち、PTA活動もとても積極的です。毎学期末の懇談会や部落懇談会は、ほとんどの



(花壇造りをする会員)

会員が参加し、毎回九十パーセント以上の出席率になっています。

懇談会のたびに、現代の子どもたちの心の貧困やゆがんだ行動が話題になり、二十一世紀を担う児童の健全育成についてPTAとしてどのように取り組んでいくか、一つの課題でした。

そんな折、学校が地区の学校緑化推進校(昭和61・62年度)の指定を受け、「豊かな人間性を育成する環境緑化の推進」という研究主題を設定したのに合わせ、「人づくりは環境作りから」を合言葉に、会員一丸となって環境緑化を進めている。

主な活動としては、正会員の奉仕作業による花壇や菜園造り、校庭周辺へのサクラ・アジサイ・レンゲツツジ・サツキなどの植樹。役員や委員による樹木の剪定・雪囲い、側溝の敷設など、子どもたちにはできないことを

進めている。また、緑化推進資金を得るため、毎年廃品回収とバザーを実施し、その他のPTA活動にしわ寄せこないようにしている。

校下住民の絶大な支援もあり、二年間で学校緑化が大きく進み、「花と緑に囲まれた学校」になりつつあり、子どもたちの姿にも変化が見られるようになって

います。樹木や花壇の手入れを本気でやるようになってきたし、小動物や草花をかわいがり、よく世話をするようにもなりました。

今年の夏休みには、近くの「蓋沼森林公園」で、全校生の親子キャンプを実施。テント設営や野外炊飯、星空の下での親子音楽会など、自然に親しみ、親子のふれ合いを深める一泊二日でした。

今後、役員会員一体となって、児童の健全育成に努めていきたい。

## 特色あるPTA活動

### 〈いわき〉

# 学校—地域—家庭の 共通理解と実践をめざして

いわき市立長倉小学校PTA

本校はいわき市のほぼ中央部に位置し、ハワイアンセンターと湯本温泉の中間にあり、鉄筋三階建て二棟、児童数九二七名の大規模校である。

昔の炭住や山林を切り開いての新興住宅団地がほとんどで、大半が共働き家庭で、人々の心のつながりが少なく、地域の連帯感や、各家庭の子どもへの教育の一貫性、共通性に欠ける面があり、学校とPTAがより一層協力していかなければならない地域である。

本校PTAは七つの専門委員会で構成されており、各専門委員会は、大きな権限をもち、それぞれの計画を実行している。各専門委員会の活発な

活動の結果は、他校には見られない人工芝の子ども広場(運動、集会広場約八〇〇㎡)、多数の遊具施設の設置など、いわき市屈指の恵まれた環境を作り上げている。中でも、

①学級委員長会による年一回の「家族学習」は、家庭の教育への関心を著しく強めていること。  
②校外指導委員会による「地区別家族ハイキング」は、家庭、地域、学校の



(家族学習のようす)

結びつきに大きく貢献し、地区子どもを守る会と協働して、自主的な地区懇談会を開催するようになってきたこと。

③施設委員会による年二回の「家族奉仕作業」は愛校の精神を親子共々に深めていること。  
など、地域の実態に即したユニークな活動で、PTA本来の目的達成に努力している。

昭和六十一年度県PTA指導者研修会に事例発表校となり、参会のリーダーの方々へ大きな教訓と感銘を与えたり、本年度は県連Pの表彰を受けるなど、過去の実績が評価され、会員は益々張切って活動しているところである。

現在は、教養委員会によるPTA研修親睦旅行の具体化で汗を流したり、施設委員会によるベルマーク整理作業と第二回目の家族奉仕作業計画に精を出しているところであるが、PTA会長、学校長を中心にした真剣な活動に感謝している。  
広報委員会も間もなくこれらの情報収集に活動を始めよう。

昭和63年度福島県PTA安全互助会加入状況 (63.9.1現在)

Table with 7 columns: 区分, 小中学校別 (小学校, 中学校, 合計), 加入人数, 加入率. Rows list various districts like 福島, 達南, 伊達, etc.

( )は幼稚園数, ○は養護学校・分校

県PTA安全互助会だより

PTA安全互助会とは 児童生徒が、学校管理下以外で起こした事故について補償するもので、家の中でのけがから、戸外での遊び中の事故、子ども会等への参加中の事故、登下校を除く交通事故にいたるまで、学校外のあらゆる傷害事故について、割合簡単な手続きで、見舞金が支給される。また、PTA会員がPTA主催、共催の行事に参加している。

加入状況は 加入の必要性、有利性から、年々加入者が増加し、本年度は、九月一日現在で加入校数八七二校を数え、加入率は、県内全校の九〇%までに達してきている。只今一〇〇%加入をめざして、中途加入もおすすめてい

安全互助事業表彰

安全互助会は、児童生徒および会員の安全を願う、事故防止に努めながら、万一の事故補償の制度として、県連Pが生み出した互助事業であり、現在では、欠くことのできない互助制度になってきている。ここに至るまでには、郡市連P役員の皆様のご努力もあり、組織をあげてのご協力もあつたことで、功績顕著な郡市連Pには、毎年県大会の席上、金一封を添えて表彰している。今年度の栄誉は次の通りである。

- ・達南PTA連合会
・安達地方小中学校PTA連合会
・伊達地区PTA連絡協議会
・石川地方連合PTA
・西白河PTA連絡協議会
・北会津地区PTA連絡協議会
・大沼郡連合父母と教師の会
・南会津郡PTA連合会
・双葉郡小中学校PTA連合会
・相馬地方PTA連絡協議会 (以上十一地区)

月刊PTA購読のお願い

進学競争の激化、問題行動の多発と、教育上さまざまな問題をかかえ、私たちは苦慮しているが、日本PTAでは、PTAの活動指針となる「月刊PTA」を発行している。本誌をご購読され、PTA活動の活性化に、また家庭教育の充実に活用していただきたい。PTA活動の専門誌として、家庭教育の手引書として、喜んでいただけると確信している。

編集後記

今年も、災害事故防止の作品を募集する。多数参加を期待している。
今年、本当の夏のような日が何日あったろうか。例年より早い吾妻山の初冠雪に驚いている。
▼やや小さめだが紅く色づきはじめてたりんごに確かな秋の訪れを感じ、自然の偉大さを再認識する。
▼冷害地の皆様にお見舞いを申しあげる。▼会報第26号「喜多方大会特集号」をお送りする。▼大会関係記事は大会事務局に依頼したが、ご多忙中、整理されて期日まで届けられ、さすが大成功を収められた地区のスタッフに感謝した。▼向寒の折各単Pの充実を祈る。